

平成 27 年度第 2 回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時：平成 28 年 3 月 1 日（火）午前 11 時から

会 場：新潟市美術館 講堂

出席者：

（委員）副会長	中山 輝也	新潟県博物館協議会副会長
	大倉 宏	美術評論家
	大島 煦美子	公益財団法人 新潟県女性財団理事長
	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部長
	菅井甚右ヱ門・哲	書人
	野川 彰夫	前 新潟市立江南小学校校長
	福永 治	広島市現代美術館館長
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸係長
	石黒 香奈子	公募委員
	坂上 義興	公募委員

（事務局）

新潟市美術館	塩田 純一	新潟市美術館長
	加藤 正人	同 副館長
	松沢 寿重	同 主幹（学芸係長）
	高橋 良子	同 総務係長
	荒井 直美	同 主査（学芸員）
	上池 仁子	同 副主査（学芸員）
	山岸 亜友美	同（学芸員）
新潟市新津美術館	横山 秀樹	新潟市新津美術館長
	高橋 努	同 副館長
	大森 慎子	同 主幹（学芸員）
	長島 彩音	同（学芸員）

次第：

- 1 部長挨拶 新潟市文化スポーツ部長 長井 亮一
- 2 開会挨拶 新潟市美術館長 塩田 純一
- 3 出席者紹介
- 4 議事
平成 28 年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館の事業計画について
- 5 閉会挨拶 新潟市新津美術館長 横山 秀樹

1 部長挨拶

今年度、新潟市美術館はリニューアルオープンを無事に果たし、また 30 周年という大きな節目の年に、すばらしい展覧会を開催することができた。また、新津美術館でも開館以来最大の入館者数を達成した。これも、皆様方からいただいたご指導、ご鞭撻のたまものと、心から感謝を申し上げる。

さて、今年ハリオでオリンピック・パラリンピックが開催されるが、そのあとは東京のオリンピック・パラリンピックに向けて、全国で文化プログラムが展開される。まだ具体的な部分は見えてこない状況だが、折しも宮田学長（委員長）が4月から文化庁長官になると先般閣議決定され、その宮田長官を地元新潟として応援し盛り立てるという意味からも、新潟市は文化プログラムに積極的に取り組んでまいりたい。

本日は、来年度の事業計画をご審議いただく。2館の運営や今後のあるべき姿、方向性について皆様からご意見を頂戴し、よりよい美術館を目指してまいりたい。

（市議会の本会議のため、部長退席）

2 開会挨拶

（塩田館長挨拶）

当館は昨年7月にリニューアルオープンし、30周年ということで、美術館として新しいステージに入ったと考える。新津美術館については、非常に特色ある展覧会事業、美術館活動を行っている。両館ともども手を携えて新潟市の文化創造にこれからも貢献していきたい。

来年度の両館の事業についてご審議いただき、忌憚のないご意見をいただきたい。

3 出席者紹介

事務局より、委員を紹介。事務局の出席者を紹介。

4 議事

（中山副会長）

会長が欠席のため代理を務めさせていただく。会長の文化庁長官就任は、私どもにとっても大変おめでたく、また名誉なことである。

事務局より、資料1、資料2及びパワーポイントの画像に沿って、新潟市美術館の平成28年度の事業計画について説明。

資料3、資料4及びパワーポイントの画像に沿って、新津美術館の平成28年度事業計画につ

いて説明。

(大島委員)

両館ともとてもすばらしい企画で感心した。両館に一つずつ伺いたい。

新津美術館にはあったが、新潟市美術館は託児について説明がなかった。部屋を確保し、外から保育士か訓練を受けた人を呼んで子どもを預かり、親御さんはどうぞゆっくり鑑賞してくださいということ。今はコンサートやほかの文化事業でも、託児ルーム設置が当たり前のようになってきているが、何か考えているか。

それから、新津美術館の巡回展について、ほかにどこを巡回するか聞きたい。

(加藤副館長)

通常の展覧会のときは、託児ルームではないが、休憩室のようなスペースを用意し、そこで授乳などできるようにしている。来年度は「やなせたかしとアンパンマン」があるので、託児サービスについて検討する予定である。

(大島委員)

アンパンマンのときは子どもと親御さんが一緒に回るので託児の必要はないと思う。託児があるなら子どもを連れて行って自分は静かに鑑賞できるというサービスについて、いかがか。

(塩田館長)

まず何を優先順位として考えるかということだと思う。託児サービスもできればそれに越したことはないが、スペースと費用の問題で、今のところはそこまで手が回らないという感じである。

(大島委員)

ぜひ今後、子育て中のパパ、ママにもやさしい美術館を発信する必要もあると思う。

(塩田館長)

スペースが問題となる。今まで閉鎖的であった図書室をオープンにしてラウンジNとした。ここは託児サービスはないが、子ども連れで来て、自由に飲食ができるし、「つながるわっか」という、紙で輪っかを作ってつなげていくプログラムに参加もできる。カフェがカジュアルな感じでリニューアルしたが、ファミリー世代、お母さんが乳幼児を連れて来ている。全体を含めてそういうサービスということで考えていけないかと思っている。

(大島委員)

市民に足を運んでもらうため、より間口を広くしていくうえでのサービスの一つとして、鑑賞中は子どもを預けて自分がゆっくり鑑賞することが新潟市美術館ではできるのだということが定着するよう、今後は考えていかなければならないのかなという思いでお聞きしたので、よろしくお願ひしたい。

(横山館長)

「藤子・F・不二雄展」は、最初は東京タワーで、その後、高岡市美術館、広島県立美術館、福岡アジア美術館、上田市立美術館等でやっている。

「天野喜孝展」は、熊本市現代美術館が最初で、兵庫県立美術館、その次が新津美術館である。規模の小さくしたものは有楽町マリオンで現在やっている。

「ヘレンド展」は5館の共同企画で、最初の立ち上がりから参画している。最初がふくやま美術館、次が新津美術館に来て、そのあとに愛知県陶磁美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、最後が東京のパナソニック汐留ミュージアムである。

(大倉委員)

巡回展がとても多い。テレビ局、新聞社と一緒に企画が多く、新津美術館はそれで大変たくさんの人を集めているし、それは場所を考えて一つの戦略としていい発想だと思うが、地元において美術館に行く私のような立場からすると、やはり内容の深い自主企画展を見たいという思いがある。今、新潟市美術館で開催している「アナタにツナガル展」は、たくさん人が来る展覧会ではないかもしれないが、訪れてみると、学芸員が長い時間をかけて作家と対話して作り上げた内容で、今日で見るのは3回目だが、そういう展覧会を見せてくれる場所が美術館の一つの大事な役割だと思う。

新津美術館の自主企画展を見ていくと、一つの特色として、地域の美術を紹介していこうという点で努力しているということが分かる。ただ、私の全く個人的な感想なのだが、隠れた名品展、所蔵品展と言われると、一種のパターン化したやり方になってしまい、学芸員がこの展覧会ではこれをやっていこうという切り口の工夫のようなものが欲しいと思う。同じ名品展というサブタイトルをつけても、西区にある名品はここを見せていこうというメリハリをつけるとか、そういう形で広報やタイトルなどにもう少し工夫があってもいいかなという感想をここ数年持っている。地域の作家に焦点を当てるとするのは非常にいいことだと思って、がんばってほしいが、同時にそれをぜひ、魅力的な切り口で見せる努力を期待したい。

(横山館長)

ご意見はごもっともなことでするので、努力してまいります。

(降旗委員)

大変変化に富んだバランスのよい企画が揃っていると感じた。

新潟市美術館は、昨年7月にリニューアルオープンして、家具や図書コーナーなどの作り方も今のニーズに合った形が取られていると思う。その中で意欲的な展覧会がたくさん開かれていて、

去年も「ラファエル前派展」から始まり、私どもの美術館も協力させていただいた「川村清雄展」が行われ、大変よかった。

来年度も「舟越桂展」、これはかなりの入館者数が各館であった企画だと思うが、それがこちらで開かれるということで、話題性があり、非常にいい形で盛り上がり広がる。「天下太平徳川名宝展」も、去年の川村清雄展からの流れの中で非常に興味深い。また、アンパンマン、やなせたかしは一般の方々への配慮もあり、大変充実した企画になっていると思う。

また、広報関係もフェイスブックを導入したり、リニューアル後のバージョンアップがきちんとされていると思う。

それから、新津美術館のほうも、今、大倉委員からご意見があったが、私自身は新潟の隠れた名品展、以前に新津美術館で会議があったときに拝見しているが、大変おもしろい企画だと思う。こういうものも非常に重要な企画だと思うが、大倉委員の話を聞いて、タイトルの付け方とかそういうところを少し工夫されたほうがいいのかと思った次第である。

目黒区美術館もそうだが、新津美術館も人数が少ない中で、学芸員の負担も大きいと思うが、巡回展を入れながら、評価できる企画のラインナップになっていると思う。普及活動についても、いろいろな変化があるのかなと思う。

質問としては、いつも充実したコレクション展をされているが、コレクション展のテーマの作り方はどのようにされているのか、両館に伺いたい。

(塩田館長)

まず、新潟市美術館のコレクション展について。私は日本だけでなく海外の美術館も含めて、コレクションをどう見せていくかということにとっても関心がある。日本の美術館はどうも常設展がおもしろくない。ただ海外の名品ということや郷土の作家ということで飾ってあり、切り口が見えない。しかしこのところ、コレクションの見せ方についてとても意識的にとらえている美術館が出てきている。東京国立近代美術館や、東京都現代美術館もそうである。どういう切り口で見せていくかということで、そのコレクションを生かしていく、そういう時代に徐々に移ってきていると思う。

私はこちらに来て、限られたコレクションをどう見せていくかということは、大きな課題と考えている。最初のころは企画展と連動する形でコレクションをどう見せられるかという視点で考えた。「川村清雄展」のときは、川村清雄はヴェネツィア、イタリアに留学して西洋画を学び、日本に帰ってきて今度は日本の伝統に出会い、そこで独自のものを作っているの、日本のものと西洋のもの、東と西の出会いというテーマで、コレクション展をやった。

また、必ずしも企画展との連携だけではなく、もう少し自由に考えてみるということで、今回は「悪い絵？」ということで、美術品の善し悪しというものが何によって決まっているのかとい

う視点から、かなり大胆で挑発的なタイトルだと思うが、そういう切り口で作品を見せた。コレクションの内容はそれほど変わらないが、それをどういう文脈を作って見せていくかという視点で考えている。

それからもう一つは、タイトルも少し魅力的に。例えば、来年度最初のコレクション展はいわゆる名品展なのだが、最初は「新潟市美術館の名品」というタイトルだったが、一工夫がほしいということで、学芸員といろいろやり取りをし、「あの絵に会いに行く」というタイトルにした。
(横山館長)

新津美術館はコレクションを飾る部屋が狭く、小さい作品しか飾れない。そこで、テーマと同時に所蔵品の中でいかに親んでもらえるかということを念頭に置いて組んでいる。企画展を見てきたお客さんがそのままの流れで見て行かれるので、新潟の地元の作家の紹介とか、地元を描いた絵とか、そういうものをなるべく取り入れてやっていこうと考えている。

それともう一つ、今年から年に1回所蔵品展を開催して、そこで大きな所蔵品を紹介する。当館の所蔵品にどういうものがあるかを知っていただける機会であり、年に1回必ずこれを入れていこうと思っている。

(中山副会長)

この会がはじまったころは、新津美術館というと旧新津市が作った、今は秋葉区の中の美術館という感覚で動いていた。それではおかしいのではないかという話がずいぶんあり、今はおっしゃるような地元密着型という形になってきて、入館者も増えている。特に各区の隠れた名品展は皆さん結構興味を持っている。その時は月と太陽という話をしたが、その月が満月に成長したと感じている。

(福永委員)

私も現場を預かる人間として同じような悩みを持っている。何とか魅力的なコレクション展ができないかと工夫している。収蔵品をどんどん増やす時代ではないので、どう活用していくかが腕の見せどころだと思うし、塩田館長がおっしゃるように、タイトルとかいろいろなところで努力されているのが見えてくる気がした。

私はいつも予算について質問するのだが、来年の企画展のラインナップを見ると、かなり工夫されていることが分かる。おそらく実行委員会形式で、負担金が2分の1や3分の1という形だろうと思う。

実は、私どもの美術館は利用料金制度となっていて、収入を支出予算に繰り入れながら展覧会を行っている。従って当初予定していた収入が入らなかった場合、それ以降の展覧会の規模を縮小していかなければならない。例えば、今回、新潟市美術館の「徳川名宝展」は2,000万円の負

担金ということでかなり大きな展覧会だが、収入が予定より少なかったらその後の展覧会に影響するようなことはないのか。あるいは、収入と支出は別々に考えていけるのか、展覧会収支のシステムについてお伺いしたい。

新津美術館のほうも「藤子・F・不二雄展」は、ほかの展覧会に比べて倍以上の予算なので、工夫されようとしている点と、収入に対する思いをお聞きしたい。

(加藤副館長)

新潟市美術館は、企画展の予算は全体で見ると平成 28 年度は 3,920 万円になるが、やはり実行委員会形式の展覧会が多く、テレビ局などの協力も得ながらやっつけようとしているのが実態である。利用料金制ということではないが、財務当局からはしっかりと歳入を上げて、その中で展覧会をやるようにと言われている。

「徳川名宝展」は、新潟市の負担は 2,000 万円、全体では 3,000 万円ほどかかる大きな展覧会なのでしっかり入館者の確保に向けて大いに努力していきたい。

(横山館長)

新津美術館で組んでいる実行委員会は、協力しながらゼロベースを目指してやっている。

「西区の隠れた名品展 新津美術館所蔵品展」や「新潟の院展作家たち展」については、単独自業でこれは持ち出しになるが、持ち出す分は考えながらやっている。特に、「藤子・F・不二雄展」などは大きな金額になっているが、今、こういう展覧会をやったときに入館料収入だけでカバーするのはなかなか難しく、グッズの売り上げも見込んでいる。「藤子・F・不二雄展」の場合にはファミリー層を考えている。ある程度の入館者数が見込めると同時に、グッズの売り上げで展覧会費がカバーできると考えている。

(金山委員)

来年度の計画を作る中で、コレクション展や企画展をいろいろ予定されているのは非常によろしいと思うが、お客を入れることも非常に注目されているので、そこにウエイトを振られているという状況があるかと思う。ただ、一方で、美術館というのは美術品を収集しそれを調査研究していくという大事な役割がある。収集の計画を今回はあげられないと思うが、収集しないというわけにはいかない。両館それぞれコレクション・ポリシーも持っているわけで、必要なものはきちんと毎年計画的に収集していくことも美術館としての大きな役割であるから、その考えをそれぞれ聞かせてほしい。

(塩田館長)

収集予算は新潟市につけてもらっている。新潟市美術館と新津美術館とで購入予算をある程度分けて、それぞれが購入する。

かつて、収集方針についてもご審議いただいたが、その収集方針にのっとって購入する。寄贈作品もあり、今年度は木村希八さんから 300 点以上の寄贈があった。木村さんは新潟県塩沢町ご出身の版画の摺師であり、ご自分でも作品を作り、なおかつコレクターでもある、非常にユニークな方だが、ご遺族から話があり、寄贈いただくことになった。せっかくの機会なので、来年度の今くらいの時期に「木村希八さんの贈り物」という形でお披露目して、コレクションの活用を考えている。

(横山館長)

収集費は、比率からいうと新津美術館はかなり低い金額になっている。収集方針の中に新潟の地元のというものが入っており、それに基づいて収集している。

今、全国の美術館では収集費がほとんどないのが現状である。新潟市は多くの市町村が合併したので、その市町村が持っていた作品があちこちの施設にたくさん残されている。その作品が保存の状態が悪くてだめになっていく現状があり、隠れた名品展をやりながらそこを発掘し、管理換えをしてもらって所蔵品を増やしていくという考えで名品展をやっている。同時に、地元の作家の作品がかなりあるので作家とのつながりもできている。購入するものについては、本年度は三浦小平二さんと玉川宣夫さんと岩田正巳さんの作品を購入するが、できるだけいいものと地元の作家を中心に買いたいと考えている。

(中山副会長)

まだ発言されていない委員からお願いしたい。

(菅井委員)

お聞きしようと思ったことはだいたい出ましたので。

問題は、いずれにしても収集費ではないかと思う。たくさんあれば今横山館長がおっしゃったように、こういう時代ですから、どういうふうにしていくかは、収集費があるなしにかかわらず、しっかり館長を中心になってお考えになっていただきたいと思う。

(野川委員)

新規が少ないのでこれを見てもそれほど多くは感じないのだが、平成 28 年度もとても中身の濃い計画だと思います。

1 点だけ、学校関係者だったので、教育普及事業のことでお聞きしたい。新潟市美術館は形を変えた形で事業を立てたと聞いた。新津美術館は昨年のを継続してやっていると感じた。今、小学校も中学校も先生方はとても忙しい。バスで迎えに来てもらって新潟市美術館に行くのに、例えば半日かけたとすると、小学校は 4 時間かかる。小学校の図工の時間は週に 1。何時間しか

ない。年間 70 あったものが減らされて 50 時間の学年もある。4 時間も使うと、低学年だと二つの題材を捨ててここに来る形になる。となれば子どもも出にくい、先生方も学校もとても忙しい状況になる。

学芸員もとても忙しいと思うが、少しだけでいいので、学校の、こういう企画をしたいという現場の先生方の声を、もしできるなら学校に行って聞くというやり方もぜひしてほしい。学校のカリキュラムに合う環境、教育の中身で、美術館を使いたい、学芸員の指導を受けたいという形になるので、学校で話し合いをしたり、あるもので研修したりするようなものもぜひ考えて、教育普及事業を進めてもらえればと思う。

(石黒委員)

先ほどパワーポイントで講座の様子を見ると、圧倒的に世代が上の方が多いと思った。それは今に始まったことではないと思うが、コンサートと合わさったすてきな企画なども、かなり上の世代の方が席の大半を占めている。新津美術館はファミリー向けの展覧会が多いこともあり、私も実際にお邪魔してご家族が多いのは目にしているが、特に新潟市美術館のお客様の雰囲気や年齢層など、平日の様子を教えてください。

(塩田館長)

美術館への来館者層は、この美術館に限らず、やはり中高年のシニア世代が圧倒的に多い。したがって講座を受講される方もそういう方が基本的に多くなっていく。ただ展覧会の内容によって、例えば今の「アナタにツナガル展」は、介護とか福祉をテーマにした作品、それから障がい者の方のアート作品なども展示しているが、割と若い方も多くいらっしやっている。この日曜日に、障がいとアートをテーマにしたトークを、作家と私でやったのだが、制作に関わっている方が非常に若い 20 代の男性作家ということもあり、聴衆は若い方が多かった。内容が若い人向けのものだと多くなるが、ウィークデーに来れる層となるとどうしても中高年世代になってくる気がする。

(石黒委員)

若い方が来館した際の講座の様子を、目で見える状態で一般の人が目にしていけないと、自分たちが行ける場所だという空気がなかなかできないのではないかと思いますので、若い方がたくさん来たときは、報告がてら、若い人たちがたくさん来ている様子を発信してもらいたい。

(塩田館長)

この「アナタにツナガル展」から展覧会専用のフェイスブックを始めた。日曜日の講座の様子ももうアップして、それに対して「いいね」と返してくれる人が多いので、SNSをどう活用していくかというのは非常に大きな課題になっていると思う。この展覧会だけに限らず、恒常的に

やっていくことも検討している。そういうことも努力していきたい。

(横山館長)

先ほど降旗委員からも話があったが、新津美術館は学芸員にかなりの負担をかけていると思うが、美術館が発信していかなければならないことも多々あるので、それについてはこれからも努力していきたい。

それから、先ほど大倉委員や石黒委員からも話があったが、新潟市美術館と展覧会の内容については住み分けをしている。新潟市には、県立美術館や新潟市の美術館が二つあり、また私立美術館もかなりの数があり、これだけ数があるところはあまりよその地方でもないと思う。その中でどのように住み分けをしていくか、考えながら提案している。

(坂上委員)

私も去年、一昨年と委員を務めて、いろいろな展覧会を紹介いただき、私が今まで知らなかった作家をずいぶん紹介していただいた。非常にありがたいと思う。

私が思ったのは、タイトルが、巡回展の場合だったらそれでいいかもしれないが、そこにプラス、館の独自のサブタイトルを含めて何か付け加えることによって、もう少しイメージアップとか集客力も出てくるのではないかと思う。去年もたしか同じようなことを言ったと思うが、広報というかそういうPRをやることによって結果がついてくると感じている。分かりやすく人を呼べるようなタイトルを考えて、それを活字にして、その中で進んでいってほしい。

(菅井委員)

一ついいですか。新津美術館はどうだったか、新潟市美術館にはあると思うが、美術館をサポートしてくれる、お手伝いしてくれる人はどういう風になっているのか。県立近代美術館にもあるでしょう。その方々がどういう動きをしてどういうふうに進めていっているのか。

(塩田館長)

新潟市美術館協力会という名称で設立されてから20年たった。設立時以来の方々がおり、だいたい100人ちょっとのメンバーがいる。コレクション展の解説ボランティアとか、美術館の広報にかかわる部分でポスター、チラシ等の配布とか、いろいろな形で美術館へご協力いただいている。ただ、だんだん年齢層が高くなってきていて、今後の課題は、もっと若い人たちにも入っていただき、美術館活動を活性化していくことが必要だと思う。

(横山館長)

新津美術館はボランティアという名称で協力していただいている。現在、登録者は40名になる。絵本の読み聞かせとイベントサポート、広報補助に分けてやっていただいている。お勤めの

方や若い方がおり、館のほうからこれをやってくださいという指定はせず、参加できるものだけお願いしている。

(大倉委員)

チラシやポスターのデザインが課題だと思う。何回も言っているが、やはり美術館というのは美の館であるので、デザインという面でもリードする存在であってほしいといつも思う。

新潟市美術館は、私が以前務めていた時期はそういう考えがまだ薄く、学芸員がチラシのデザインをやっていた時代があった。学芸員にデザインセンスがある場合とそうでない場合があって、それですごく差が出てくるが、それはあまりあるべき姿ではないと思う。

新潟市は、今とてもいいデザイナーがたくさん活躍する時代になっているので、予算との絡みもあるのでデザイナー起用はすぐには難しい面もあるかもしれないが、今後、できればチラシを見たときに、先ほど切り口の問題が出ましたが、デザインそのものも含めて、見に行きたいと思えるデザイン戦略を、両館とも今後検討していただけるといいなと思う。新潟市美術館のデザインは、個人的には最近とても魅力的なものが多いと思っている。新津美術館の、地元の美術館、地元の作家をやろうとしている姿勢をすごく応援したいので、絵好きではない全然関係ない人も惹きつけるような広報戦略、デザインも含めてがんばってほしいと思う。

(中山副会長)

ご意見をいただきありがとうございます。このご意見については事務局でさらに検討していただきたい。以上をもちまして、本日の議事を終了します。

5 閉会挨拶

(横山館長挨拶)

本日はお忙しい中、新潟市美術館、新津美術館の事業についてご審議いただきありがとうございました。両館とも皆様方からいただいたご意見を基にして、平成 28 年度の事業を展開していきたい。両館の目指すところは多くの市民に来ていただきたいということだと思う。今日のご意見を生かしていきたい。

また、今回の協議会をもって任期が終了される方もいらっしゃる。本当にありがとうございました。また、引き続きお願いする委員の方につきましては、次年度もよろしくお願ひしたい。